

夏日悟空上人の院に題するの詩（杜荀鶴）

三伏閉門披一衲 兼無松竹蔭房廊  
安禪不必須山水 滅却心頭火亦涼

解説 夏の暑さにも変わることなく仏道に精進している悟空上人に贈った詩。

三伏 門を 閉じて 一衲を 披く

兼ねて 松竹の 房廊を 蔭う 無し

安禪は 必ずしも 山水を 須いず

心頭を 滅却すれば 火も 亦 涼し

語釈 ※院 僧侶の住むところ。 ※三伏 夏至のあとの三番めの庚の日を初伏、四番めの庚の日を中伏、立秋後の最初の庚の日を末伏という。陰気が起ころうとするが、陽気に押えられて出てくることができず蔵伏しているから伏日という。この時期は一年中で最も暑い。 ※一衲 僧衣。 ※披 着る。 ※房廊 部屋と廊下。 ※安禪 坐禪。夏にする坐禪のことを夏安居とか、坐夏などという。 ※心頭 心ころ

通釈 暑さのはなはだしい三伏の時節、山門を閉じ、僧衣を着る。それに、住まいをおおってくれる松や竹の樹木もない。だが、夏安居して修行をつむには、必ずしも山水の環境を必要としない。心中から暑いという雑念をはらいされば、火中にあっても涼しさを感じるものだ。